

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

『記・紀』にみる伝統スポーツ —古代日本の相撲とポスト・グローバル化—

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2015-12-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 船井, 廣則, FUNAI, Hironori メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2016

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



『記・紀』にみる伝統スポーツ
—古代日本の相撲と。ポスト・グローバル化—

船井 廣則

はじめに

二〇一五年五月二二日付の朝日新聞は、平城京跡から二八年前に出土した土師器の皿が、遊びの道具に使われた可能性があると、奈良文化財研究所の発表を報じた。この皿には表面に数ミリ程度の丸印が円形に三〇個、その円を六等分するように放射状に一九個刻まれていたが、その意味についてはこれまで解明されないまま保管されていたという。

今回この皿が使われたと推定された遊びは、すでに七世紀の百済で遊ばれており、今日も韓国では正月の遊びとして親しまれているということだ。それはすころくに似た「ユンノリ」と呼ばれている。もちろん、遺跡からはこの遊びに使われる棒や駒にあたるものが見つかっていないわけではなく、今のところ文献資料による補強もされていない仮説のようである。したがって、軽々に断定はできないとしても、今後研究がさらに進めば室内での盤上遊戯のような精緻な遊び文化までもが、この時期の朝鮮半島と奈良地方とで共有されていたことを覗わせる資料のひとつにはなりそうである。

朝鮮半島や中国本土からの渡来物であっても、当時すでに耳目をそばだてるような物珍しさはなくなっていたかも知

れない。というのも、中国とはすでに紀元前一世紀には朝貢による国交が始まっていたし¹⁾、また半島とも四世紀半ばの古墳時代から国交のあった考古学的証拠が残されている²⁾からである。

さらに、六世紀末頃には百済から僧や技術者を招いて法興寺（飛鳥寺）を建立するほどにまでなっている。それゆえ、人や物そしてそれらが織りなす文化の交流は、中断を挟みつつも絶えることなく続いてきたといえる。

さて、平城京で上記の皿が使われていたと想定された八世紀前半は、日本史では飛鳥時代の終わりから奈良時代にかけての時代区分に相当する。これは日本最古の歴史書と呼ばれる『古事記』（七一二一年）、そして最古の正史とされる『日本書紀』（七二〇年）がともに成立したとされる時期でもある。編纂の意図やその内容については相違がみられるものの、いずれにおいても神話の世界を含むさまざまなエピソードが展開されており、その中には遊びやスポーツに関わる記述も散見される。

いっぽう、二一世紀の今日の世界に目を転じると、西欧を発信地とする経済のグローバル化がこれ以上のフロンティ

アを見いだせない所まで行き着いていることに気づかされる。このことはスポーツ文化についても同様で、IOCやFIFAなどスポーツ統括団体と多国籍企業やマスメディアとの強力なタッグは、もはやアスリートの身体をサイボーグ化するところまで追い詰めている。

この小論は古代日本で編まれた史書の記述から、当時の人々が遊びやスポーツにいかに向き合っていたのかを読み取ることによって、グローバル化の次に現象するであろう遊戯やスポーツ・シーンの行方を指し示す手がかりを探ろうとするものである。

1. スポーツ文化のグローバル化

マンフレッド・B・ステイガーはその著書の中で、研究者たちの定義を列挙した上で、次のように簡潔にグローバリゼーションを定義付けている。

「グローバルゼーションとは、世界時間と世界空間を横断した社会関係および意識の拡大・強化を意味する」⁹⁾

これに続けて、この現象が新しい事柄なのかどうかを確認するためとして、先史時代（紀元前一万年～紀元前三五〇〇年）・前近代（紀元前三五〇〇年～紀元一五〇〇年）・初期近代（一五〇〇～一七五〇年）・近代（一七五〇～一九七〇年）・現代（一九七〇年以降）という五つの時代区分からなる、おまかな年代記を提示した。そして、グローバルゼーション

が何世紀もの長きに亘って質的に相違する時代の諸境界を横切って進展してきた長期的な過程であったことを明らかにしようとした。

ステイガーのこの時代区分にしたがえば、『記・紀』が編纂された古代日本社会は「前近代」にあたる。「前近代」にあつて、遠距離コミュニケーションの増大や文化・テクノロジー・商品・疫病の交流を推進した諸帝国の中で、もっとも先進的、かつ長期にわたって支配力を維持したのは中華帝国だった。その中華帝国の構築したグローバルな貿易ルートであるシルクロードの最東端が古代日本の地理的布置であった。

もともとはローカルな存在であった仏教が世界宗教となつてユーラシア大陸の東の果てにまで到達したことも、すでにグローバルゼーションの過程の出来事であったといえるかもしれない。宗教以外の他の文化についても同じ流れの中にあつたであろうことは論を待たないが、その中には遊びや身体文化、場合によってはスポーツとさえ呼べる「もの」や「こと」も含まれていたと推測するのはたやすい。それは巨大帝国、中国の書籍に角抵、蹴鞠、囲碁、雑伎などの名辞や図像が残されていることから知れる。

グローバルゼーションという名辞の初出がいつ頃のことであつたかは別として、それが世界的に認知されるようになるのは一九九〇年代になってからであり、上述のステイガーの時代区分でいえば「初期近代」、「近代」を経た「現代」ということになる。

その「現代」とは世界を二分していた冷戦構造が、ソビエ

ト連邦をはじめとする社会主義諸国の自壊によって単一の世界市場が生み出されたこと、それに交通・通信手段の飛躍的な発展が加わってそれ以前とは比べものにならない速度で地球が収縮を続けている時代のことである。それゆえにこそ、ジョージ・リッツアの「マクドナルド化」⁽⁴⁾を引き合いに出すまでもなく、現代に生きる私たちにこの名辞が実感を持たせて受け入れられているのだろう。現代スポーツが置かれている状況とその問題点については、最後まで一度触れることにする。

2. 建御名方神（タケミナカタ）と建御雷神（タケミカヅチ）の「力競」

前の章ではグローバル化の意味を検討し、そして、ユーラシア大陸の極東の地である古代日本も、当時のグローバルな中華帝国の影響下にあったことを確認した。

ここでは時の流れを一足飛びに一五〇〇年以上遡って、古代の日本人たちの生活の周りに見られたであろうスポーツ文化、とりわけ相撲について『記・紀』神話や伝承に残された記述を手がかりに考察してみたい。

最も広い概念でとらえた相撲として、多くの研究者たちは次の二つを『記・紀』神話のなかに見いだしている。ひとつは『古事記』の国譲り神話に登場する建御名方神（タケミナカタ）と建御雷神（タケミカヅチ）の対戦である。つぎに『日本書紀』垂仁天皇の段に記述されている野見宿禰（のみのすくね）と当麻蹶速（たいまのけはや）の対戦がそれである。

まず、国譲り神話に現れた対戦を見てみよう。天つ神の天

照大神（アマテラス）は、国つ神である大国主神（オオクニヌシ）が支配する地、葦原中津国（あしはらのなかつくに）をその子の天忍穗耳命（アメノオシホミミ）に治めさせようと、大国主神のもとに使いを派遣した。国を譲れという使者、建御雷神に大国主神はまず息子達の意見を聞くようにいう。長兄の事代主神（コトシロヌシ）は承知したが、弟の建御名方神（タケミナカタ）は承服せず、力による勝負を挑んだ。神々の対戦の様子を記した本文と現代語訳を以下にあげる。

「其の建御名方神、千引の石を手末に擎げて来て、『誰ぞ我が国に来て、忍び忍び如此物言う。然らば力競為む。故、我先に其の御手を取らむ』と言いき。故、其の御手を取らしむれば、即ち立氷に取り成し、亦剣刃に取り成しつ。故、爾に懼れて退き居りき。爾に其の建御名方神の手を取らむと、乞い帰して取りたまえば、若葦を取るが如、搦み批ぎて投げ離ちたまえば、即ち逃げ去りぬ⁽⁵⁾」

「建御名方神が大きな石を手の上に差し上げてきて、『誰だ、わしの国に来て内緒話をしているのは。さあ、力比べをしよう。わしが先にその手を掴むぞ』といいました。そこでその手を取らせますと、立っている氷のようであり、剣の刃のようでありました。そこで恐れ退いております。今度は建御雷神が建御名方神の手を取ると、若い葦を掴むように掴みひしひと、投げ飛ばしたので建御名方神は逃げていきました⁽⁶⁾」

ここにみられるのは交互に手を取り合つての「力比べ」といった趣で、現代の大相撲などとは全く異なるシーンが展開されている。『古事記』が天皇家のいわば私史であつて、王権の正当性を周知させる目的を持つて編まれたものであり、建御雷神と建御名方神の「力競」も、在来勢力（国つ神）を外来勢力（天つ神）が征服支配するという出来事の暗喩である。

しかし、その「力競」のようすは全く根拠のない『古事記』編纂者たちによる創作ではなく、彼らが見聞きしていたであろう、当時の人々の間で行われていた「力比べ・相撲」を反映したものである⁽⁷⁾。

3. 野見宿禰と当麻蹶速の「拵力」

次は『日本書紀』に記された野見宿禰と当麻蹶速の対戦である。実在した可能性もあるとされる垂仁天皇に関する記述の七年の段にそれが見られる。両者が対戦する部分の前後の本文と現代語訳を以下にあげる。

「朕聞、當摩蹶速者天下之力士也。若有比此人耶。」
 一臣進言「臣聞、出雲國有勇士、曰野見宿禰。試召是人、欲當于蹶速。」即日、遣倭直祖長尾市、喚野見宿禰。於是、野見宿禰、自出雲至。則當摩蹶速與野見宿禰令拵力。二人相對立、各舉足相蹶、則蹶折當摩蹶速之脇骨、亦蹈折其腰而殺之。故、奪當摩蹶速之地、悉賜野見宿禰⁽⁸⁾。

「朕が聞くには、当麻蹶速は天下一の力持ちだそうだが、これに比べられる人間がいるだろうか。すると一人の臣下が進み出て申し上げた。『私が聞いた話では、出雲国に勇士がおります。野見宿禰といいますが、試しにこの人物を呼んで、蹶速と手合わせさせてみたらいかがでしょうか。』そこで、その日のうちに倭直（官職名）の祖長尾市を使者として、野見宿禰を呼びにやらせた。こうした野見宿禰が出雲からやってきたので、さっそく野見宿禰と当麻蹶速に力比べをさせた。二人は向かい合つて立ち、それぞれ足を上げて蹴り合ったが、たちまち宿禰が蹶速のあばら骨を蹴り折り、さらに腰骨を踏み折つて殺してしまった。これによって天皇は、蹶速の領地を没収して、ことごとく野見宿禰に与えた⁽⁹⁾。」



図1 野見宿禰と当麻蹶速の天覧相撲
 出典 <http://www.city.katsuragi.nara.jp/index.cfm/14,18746,41,387.html>

この対戦のようすも『日本書紀』本文でいえば、わずか漢字二七文字と情報量はきわめて少ない。戦いの経過を詳細に記録することが目的でないことは、上述の建御雷神と建御名方神の「力競」の場合と事情は同じであるからやむを得ない。ここでは、この対戦を指して「搦力」の文字が使われていることに注目したい。『日本書紀』は中国の史書をまねた官選の歴史書とされており、この名辞の使用もそれを裏付けている。

最終的に国譲りを承諾したことで、建御名方神が許されたのとは異なった展開がここでは見られる。当麻蹶速は腰骨を踏み砕かれて死んでしまうのである。よって、これは生死をかけた決闘であったといえる。そして「各擧足相蹶」と記述された足技を使うその戦いのようすから、国譲りにみえる「力競」とは別種の徒手格闘技であったことがわかる。

新田一郎は、「搦力」という名辞の使用について興味深い指摘をしている。すなわち、『日本書紀』の書かれた当時の相撲と、多様な格闘技そのものとしての相撲の原型との区別を意図してこの「搦力」が使われたのであり、蹶速の名もそのような格闘技が象徴されているのではないかというのである⁽¹⁰⁾。

4. 「相撲」の初出とその「いでたち」

「力競」や「搦力」ではなく、現代の私たちにもなじみのある「相撲」の名辞が登場するのは、上述の二例よりももう少し後の時代を扱った記録の中である。それは意外にも最近までまじめな考察の対象にはなりにくかった、といわれる女相

撲と関わっていた。『日本書紀』雄略天皇一三年の段がそれである。次に該当箇所の原文と現代語訳をあげる。

秋九月、木工韋那部真根、以石爲質、揮斧斲材、終日斲之、不誤傷刃。天皇、遊詣其所而怪問曰「恆不誤中石耶。」真根答曰「竟不誤矣。」乃喚集采女、使脫衣裙而著犢鼻、露所相撲。於是真根、暫停、仰視而斲、不覺手誤傷刃。天皇因嘖讓曰「何處奴。不畏朕、用不貞心、妄輒輕答。」仍付物部、使刑於野⁽¹¹⁾。

秋の九月に、大工の葦郡部真根（いなべのまね）が石を台にして手斧で木を切っていた。終日やっていたが、手斧が石に当たって刃を傷めるといふことは一度もなかった。そこに現れた天皇は、不思議に思っただけで問いかけた。「いつも石に誤って当てることはないのか」。真根が答えて言った。「けっしてありません」。すると天皇は宮中に仕える采女（うねめ）たちを呼び、衣服を脱がすと、フンドシを着けさせ、人の見ているところで相撲を取らせた。真根はしばし手を休めて、仰ぎ見てから木を削ったが、不覚にも手元が狂って斧が石に当たり、刃を傷つけてしまった。そこで天皇は真根を責めて言った。「どこのどいつだ。朕を恐れずに、慎みの心もなく、いかげんなことを軽々しく答えたやつは」。そして、刑吏の物部氏の者に引き渡して、野原で殺すように命じた⁽¹²⁾。

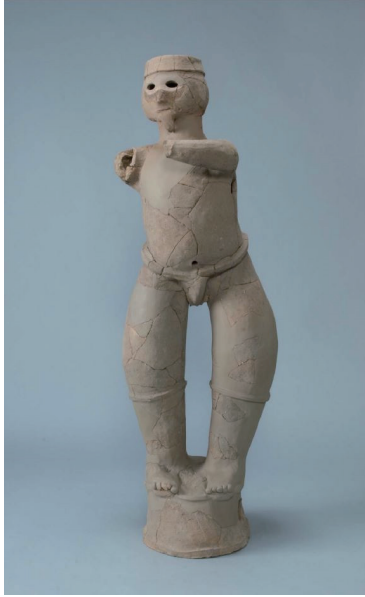


図2 井辺八幡山古墳出土 男子立像(力士型)埴輪
 出典 http://www.city.wakayama.wakayama.jp/menu_1/gyousei/bunshin/bunkazai/bunkazai_shiryo.html

雄略天皇は『宋書倭国伝』や『梁書』の記述による傍証から、一般には倭の五王のうちの最後にあたる「武」に比定されている。とすれば、上述のエピソードは五世紀の古墳時代のものであろう。暴虐な王との印象が強い雄略天皇だが、このときは同僚の大工たちの嘆願を聞き入れて真根の命を奪わなかった。

ところで、ここにも重要な名辞が二つみえる。ひとつは「相撲」で、これが日本の史書に登場する最初のものだと言われている。そしてもう一つ注目すべきは「犢鼻(とうさぎ)・禪」である。つまりこのころまでには、現代にも通じる裸身に禪という相撲を取る際の「いでたち」が一般的になっていたことをこの記述は物語っているのではないだろうか。

妾女(うねめ)⁽¹³⁾たちのこうした裸身に禪の「いでたち」は、日本各地の古墳から出土する力士埴輪にもみることができ。中でも有名なものは、和歌山県井辺八幡山古墳の男子立像埴輪(力士埴輪)である⁽¹⁴⁾。高さが一一三・五センチもあるこの須恵器の埴輪は、一九六九年に和歌山市教育委員会と同志社大学文学部考古学研究室が合同で行った調査で発見され、その「いでたち」から力士像埴輪とも呼ばれている。

同様の埴輪は福島県泉崎村原山古墳からも出土している。先に述べたように、当麻蹶速を倒した野見宿禰は蹶速の領地を与えられた。その後、野見宿禰はこの地でそれまでの天皇葬礼時の殉死の風習をなくすべく埴輪の製作を提言したという。『日本書紀』の同じ垂仁天皇三二年の段に次のような記述が見られる。

卅二年秋七月甲戌朔己卯、皇后日葉酢媛命一云、日葉酢根命也薨。臨葬有日焉、天皇詔群卿曰「從死之道、前知不可。今此行之葬、奈之爲何。」於是、野見宿禰進曰「夫君王陵墓、埋立生人、是不良也、豈得傳後葉乎。願今將議便事而奏之。」則遣使者、喚上出雲國之土部壹佰人、自領土部等、取埴以造作人・馬及種種物形、獻于天皇曰「自今以後、以是土物更易生人樹於陵墓、爲後葉之法則。」天皇、於是大喜之、詔野見宿禰曰「汝之便議、寔洽朕心。」則其土物、始立于日葉酢媛命之墓。仍號是土物謂埴輪、亦名立物也。仍下令曰「自今以後、陵墓必樹是土物、無傷人焉。」天皇、厚賞野見宿禰之功、亦賜鍛地、卽任土部職、因改本姓謂

土部臣。是土部連等、主天皇喪葬之縁也、所謂野見宿禰、是土部連等之始祖也⁽¹⁵⁾。

これを要約すれば、皇后の日葉酢（ひばす）がなくなった際に、垂仁が殉死の風習を廃してそれに代わる方法を臣下に尋ねた。これに応えて、野見宿禰が出雲国から土師器制作者百人を招集して人や馬などをかたどった埴輪を作らせ殉死者の代わりとして御陵に埋めた。天皇はこれを喜んで野見宿禰を土師部の司に任命した、ということになるか。

土師部はこれ以降、天皇の葬礼を司る役割を任じることになるのだが、これは『古事記』と異なり、各氏族の伝承までも採り上げている『日本書紀』が、土師氏の始祖の功績のエピソードとして挿入したものと考えられている⁽¹⁶⁾。この埴輪の製作年代が六世紀頃とされているので、当時の力士が相撲を取るときの特徴的な「いでたち」が裸身に禪であったことを考古学的にも確認できる。

5. 隼人の相撲と神話

実際に相撲が行われたであろう、とされる最も古い記録が『日本書紀』にみられるという。それは皇極天皇秋七月の次のような記述である。

秋七月甲寅朔壬戌、客星入月。乙亥、饗百濟使人大佐平智積等於朝。或本云、百濟使人大佐平智積及兒達率闕名・恩率軍善。乃命健兒、相撲於翹岐前。智積等、宴畢而退、拜翹岐門。⁽¹⁷⁾

日本史では一般に推古天皇以降については史料として扱うことも可能とされているので、それよりも二代後の皇極紀に書かれた事柄の信憑性は高いと思われる。皇極天皇元年は西暦六四二年であり、この相撲が催されたのは日本史の時代区分でいえば飛鳥時代の中頃ということになる。

この記述について、長谷川明は百濟からの使者である智積（ちしやく）と、使者の到着より前に日本に亡命していた百濟の王族翹岐（ぎょうき）を招いた宴会の席上、「健兒」に命じて相撲をとらせたと解釈しているが、新田一郎の見解はそれとは異なっている。新田はこの相撲が智積ではなく翹岐のために行われた催しで、少し前に亡くなった翹岐の子の葬送に関わる百濟の習俗に関連するものと推定し、東北アジアから朝鮮半島へという北方文化の流れを示唆している⁽¹⁸⁾。

さらに長谷川は「健兒」を「ちからひと」、新田は「こんでい」と訓じている点にも違いが見られる⁽¹⁹⁾。どちらの解釈がより史実に近いか否かは別として、力士（健兒）たちの「いでたち」がどのようなものであったかは、いずれにせよこの記述からうかがい知ることができない。

『日本書紀』における相撲の記述は、これ以降、天武天皇の一一（六八二）年と持統天皇九（六九五）年にも見られる。

前者では大隅の隼人と阿多の隼人が天皇の前で相撲を取り、大隅の隼人が勝ったことが記録されており、これが最も古い天覧相撲の記述とされている。後者では持統天皇が飛鳥寺の西の広場で、大隅の隼人たちの取る相撲を見物したとある。ちなみに、飛鳥寺の西の広場は、当時辺境諸族の朝貢・

服属儀礼の際に用いられた場所と言われている⁽²⁰⁾。

この隼人とは、畿内の王権からみたときに、辺境の地である薩摩半島や大隅半島に居住し、自分たちとは風俗習慣が異なっていることから用いた蔑称である⁽²¹⁾。隼人たちはしばしば倭王権に抵抗を試みたものの次第に服属させられ、律令体制になってからは、衛門府の隼人司のもとで宮廷の警護などにあたる近習として仕えたとされる。

右の二つの記述は隼人たちが相撲を特技としており、それを天皇らの見物に供したことを伝えてはいるものの、「いでたち」についてはやはり何も教えてくれない。だが、さいわいにも『記・紀』のいずれにも記述のみられる海幸山幸神話はそのヒントを与えてくれている。

兄の海幸である火照命（ホデリ〈記〉）・火酢芹命（ホスセリ〈紀〉）が弟の火遠理命（ホオリ〈記〉）・彦火火出見尊（ヒコホホデミ〈紀〉）に詫びて服従を誓うときの、パフォーマンスがそれである。一般にこれは隼人舞の起源とされているが、『日本書紀』第四の「一書」はそのシーンを次のように表現している。

・・・於是、兄著犢鼻、以赭塗掌塗面、告其弟曰「吾汚身如此、永爲汝俳優者。」乃舉足踏行、學其溺苦之狀・・・⁽²²⁾

これを現代語にすれば、兄の火須勢理命は褌を締め、赤土を手のひらに塗り、顔に塗り「こんな汚い格好で、これからはおまえの俳優者（わざおぎひと）になるう」といって足を

上げ地面を踏んだ、ということになるうか。

先述の野見宿禰の例のように『日本書紀』が各氏族の来歴を語らせ、それを採用しているとすれば、ここで火照命・火酢芹命が隼人の祖先とされているのも同じ構造と見ることが出来る。右のエピソードから想像される、隼人の赤土を顔に塗り、犢鼻（とうさぎ・褌）を締めたその「いでたち」は、雄略天皇一三年の采女の記録の際にもあげた井辺八幡山古墳の男子立像埴輪や泉崎村原山古墳の力士像埴輪に限りなく近いものであったように思われる。さらに付け加えるなら、「乃舉足踏行」は四股の所作と取れなくもない。



図3 福島県泉崎村原山古墳 力士埴輪
出典 http://sports.geocities.jp/sumou_caffe/izumizakimurashiryokan.html

上述のように、隼人は自称ではなく、あくまで畿内の王権が中央から周辺の人々をさげすんで名づけた呼び方であった。薩摩半島の地域に居住した阿多人は「万之瀬川水系に勢力を持ち、海洋性・交易にとんでその下流域では農・牧・鵜飼などをいとなんでいたと推定」⁽²³⁾されるといふ。また薩摩半島対岸の大隅半島にも大隅隼人と呼ばれた人々が、そしてさらに南方の島嶼にまでも隼人がいたということである。よってこのことから、彼らが中央の倭王権に服属する以前は、南九州地域から南の島嶼部を含む一帯に独自の文化圏を形成していたと考えられる。けつきよく、本来大隅人や阿多人が持っていた神話が、『記・紀』神話の編纂者たちによってすり換えられ、中央に服属・奉仕する由来を語る神話として取り込まれたのが海幸山幸の物語であった、ということのようである。

中国大陸南部から琉球弧状列島を経て南九州へと、裸身に褌という「いでたち」とともに相撲が伝承されてきていたとすれば、それは倭王権の人々の目にはなじみのない蛮風であったに違いない。であればこそ、吠声に見られるような彼らを持つとされる呪力にも期待したのではなからうか⁽²⁴⁾。

6. 力士徴用・支配システムとしての相撲節

たしかに相撲は隼人の特技ではあった。しかし、それは相撲が隼人たちだけのものであったということを意味しない。東アジア各地ではモンゴルのブフや、韓国のシルム、沖繩角力、中国の角抵、ヴェトナムのヴァット、フィリピンのブノなどが今日でも見られるが、その祖型である徒手による格闘技は

おそらく古代にも存在したであろう。とすれば、日本各地にも隼人以外に相撲を得意とする人々が存在したとしても不思議ではない。

日本の相撲の伝播経路について、北方由来なのかそれとも南方由来なのかといった論議があるが、世界のほぼあらゆる民族が持つという徒手格闘技であるからには、始原の日本にあっても相撲のルーツにあたるものはあったであろう。南北いずれにせよ、きわめて長い時間をかけての文化交流の過程で影響を受けつつ形成されてきたと考えれば、それはなにも南九州といった一地域に限ったことでなく、日本の各地にさまざまな形態で存在したのかも知れない。

古代日本の相撲がアイデンティティを持つにあたって、大きな役割を果たしたのが相撲節であった。九世紀には平安時代の宮廷の年中行事として定着したといわれる相撲節だが、新田一郎によれば、農耕と服属の二つの儀礼にその起源が求められるという⁽²⁵⁾。

服属儀礼については、すでに上でみてきたように『日本書紀』の天武天皇一年と持統天皇九年の記述にある「隼人相撲」であり、それは異俗異風の被征服者に呪術的能力を期待してのものと意味づけられていた。もう一方の農耕儀礼はといえば、その年の作柄を占う「年占の神事」であり、これも先述の野見宿禰と当麻蹶速の対戦が垂仁天皇の七年七月七日とされていることから、ここにも七夕の水の神の神事に結びつけようとする意図が見え隠れしていた。

新田一郎は相撲節の冒頭に四尺以下の小童による「占手相撲」が行われたことや、貞観年間（八五九〜八七七）以前は

第一番の取組では右方の相撲人がわざと負けるなどの例をあげて、この年中行事が国家的な年占として意味づけられていたことを指摘している⁽²⁶⁾。

こうした意味づけとともに、相撲節には各地に存在した力自慢の者たちを定期的に出仕させ、その中のすぐれた者を留めおいて朝廷の防衛の任にあたらせるといふ、現実的な機能もあった。もちろん、そのように力士たちを定期的に遅滞なく中央に送り届ける行為を、大和朝廷にたいする忠誠の証として在地の勢力に絶えず認識させるための支配システムでもあったことを見逃すことができない。

まとめにかえて

神話の世界から再び現代のスポーツ文化に目を転じてみよう。近代においては、大英帝国による植民地経営に同国発祥の諸スポーツ種目が大きな役割を果たしたことをもって、スポーツ文化のグローバル化の嚆矢とすることができよう。これに続くのが近代オリンピック・ムーブメントで、その歴史はスポーツのいわば「地球規格」が五つの大陸を席巻していく過程を物語っている。

マックス・ウエーバーの形式合理性の概念に着眼し、その官僚制の事例をファストフード・レストランに置き換えて、生産と消費の両面を含むあらゆる生活領域に合理化過程が浸透していく、と主張したのが冒頭で紹介したリッツアだが、これは当然のごとく生活領域の一部を占めるスポーツ文化についても妥当するだろう。

「技術的に計算可能で、普遍的に適用可能な法則や規則の

もとで諸事象が配列されている状態」⁽²⁷⁾とされるウエーバーの形式合理性は、今日のスポーツ・シーンでは頻繁に目にする。

例えば陸上競技や水泳、スキーといったオリンピックや世界選手権などにおける公式記録は、すべて電子計時となっており、百分の一秒単位で表示（陸上は切り上げ、水泳は切り捨てなど少数以下第四位の扱いは競技によって異なるが、実際には千分の一秒まで計測）されることである。

また、ホークアイに代表されるIT技術を用いた審判補助システムがクリケットやテニス、サッカーの試合に導入されていることももう一つの例としてあげることができる。今のところ審判が判定する際の補助的役割しか与えられていないとはいえないものの、ホークアイの製造販売会社を買収した多国籍企業ソニーによれば、判定時の映像までも提供できるとしており、やがては機器による判定が下す判定に取って代わる可能性をうかがわせている⁽²⁸⁾。それはスポーツを観戦する人々がヒトよりもモノの判定に信を置くということであり、従来のスポーツ文化には見られなかった変化のひとつとなるだろう。

いっぽうで、グローバルな商業メディアにとつてのスポーツイベントは、現代においては莫大な収益を見込めるビジネスチャンスを提供する、いわば金の卵となっている。それはスポンサーとして名乗りを上げることによって、効率的な宣伝効果を期待できる多国籍企業にしても同様である。

それは巨大スポーツイベントの総元締めたるIOCやFIFAなどの首脳部がこれまで作り上げてきた資金調達

システムなのだが、だからこそというべきか、スポーツの商品価値を高めるためにはルールや試合開催時間を恣意的に変更してまで、顧客たる多国籍企業の意向に沿う「サービスマ」もしてきている。大きな権限を手にした巨大スポーツイベントの総元締たちの周りに、絶えず大会開催にまつわる黒い噂がつきまとうのは、いわずもがなのなりゆきなのもかもしれない⁽²⁾。このシステムは競技の醍醐味を満喫しようとするスポーツファンや、試合前のコンディション調整に細心の注意を払うアスリートたちへの配慮よりも間違いなく利益の追求が優先されていて、スポーツ文化の変容を促進する力となっている。

全地球上を統一された市場とする他には、資本主義がこの後も命脈を保つ道がないとすれば、市場を作り出す資本のブルドーザーは、規格化・画一化・普遍化の過程で障害となる非合理的なもの、周縁的なもの、時代の流れから外れた伝統的なものなどを押しつぶし、埋め尽くしていくこと

になる。スポーツ文化における伝統的なものも、こうした圧倒的な力の前に立たされている。

今日残る伝統スポーツを無形文化財のように保護・温存していくこともひとつの方法であるが、ステイガーのいうように、ハワイのピジン英語や、キューバ風中華料理などハイブリット（あるいはクレオール）な現象に肯定的なまなざしを向けることも、もうひとつの選択肢として有効なのではないだろうか。その意味で、たとえ後付けの「伝統」であったにせよ、今となっては外国人力士に横綱の座を占められているにせよ、古代にその淵源を持つ伝統スポーツの骨格をしぶとく再生・維持している大相撲には、その可能性が見いだせるのではないだろうか。興業としての大相撲と今や国際大会も開催されるアマチュア相撲とが二重の存在様態として有り続けることはただ日本のみならず、世界にとっても意味のあることではないだろうか。

【註および参考文献】

- (1) 西暦一世紀後半に班固らによって編纂された『漢書』には、朝鮮半島の南の海のかなたにある倭についての記述がある。
- (2) 奈良県石上神宮の七支刀は、三六九年に百済が倭との国交を樹立するため倭王に贈ったものといわれる。
- (3) マンフレッド・B・ステイガー 桜井公人他訳 『新版 グローバリゼーション』岩波書店 二〇一一年 二〇頁
- (4) ジョージ・リッツァ 正岡寛司監訳 『マクドナルド化する社会』早稲田大学出版部 一九九九年
- (5) 長谷川明 『相撲の誕生』青弓社 二〇〇二年 一三頁
- (6) 武田祐吉 『現代語訳 古事記』角川文庫 一九五六 位置No.5071-5080
- (7) 長谷川明 前掲書 一九頁

- (8) 『日本書紀』卷第六／垂仁天皇 http://www.seisaku.bz/shoki_index.html
- (9) 長谷川明 前掲書 二四頁
- (10) 新田一郎 『相撲の歴史』講談社学術文庫 二〇一〇 三四頁
- (11) 『日本書紀』卷第一四／雄略天皇 http://www.seisaku.bz/shoki_index.html
- (12) 長谷川明 前掲書 五五頁
- (13) 宮廷に使えた女官の一種
http://www.city.wakayama.wakayama.jp/menu_1/gyousei/bunshin/bunkazai/bunkazai_shiryo.html
- (14) 『日本書紀』卷第六／垂仁天皇 http://www.seisaku.bz/shoki_index.html
- (15) 長谷川明 前掲書 三八頁
- (16) 『日本書紀』卷第二四／皇極天皇(六四二～六四五年) http://www.seisaku.bz/shoki_index.html
- (17) 新田一郎 『相撲の歴史』講談社学術文庫 二〇一〇 四〇頁
- (18) ちなみに、「ちからひと」は「古代、兵士の中から特に選ばれた強健な者」「デジタル大辞泉」であり、「こんでい」は平安時代の兵制の一つ。奈良時代末期から、軍団が私物化され農民の疲弊を招いたので、延暦一一(七九二)年、軍団の制度が一部を除いて廃止されると、これに代って郡司や富裕者、有位者の子弟を採用して健児とし、軍団の兵士と同様の任務につけ、国府におかれた健児所が彼らを統率した。「ブリタニカ国際大百科事典」とされる。したがって皇極元(西暦六四二)年に健児「こんでい」と呼ばれていたかは疑問である。
- (20) 新田一郎 前掲書 八三頁
- (21) “隼人の地” というのが、古代において決して文化や生活水準の劣る土地ではなかった」と考える研究者も存在する(森浩一 『日本神話の考古学』朝日新聞社 一九九三 一六一頁)し、新田一郎も「記紀神話では、天皇家の祖先と隼人族の祖先とは兄弟であったとされている」と述べている(前掲書 八一頁)。
- (22) 『日本書紀』卷第二／神代下 http://www.seisaku.bz/shoki_index.html
- (23) 上田正昭 『新修 日本の神話を考える』小学館 二〇〇三 二〇九頁の註 中村明蔵 『新訂隼人の研究』一九九三 『隼人の古代史』二〇〇一
- (24) 上田正昭 前掲書 二一三頁
- (25) 新田一郎 前掲書 七九頁
- (26) 新田一郎 前掲書 八〇頁

- (28)(27) 丸山哲央 『文化のグローバル化』 ミネルバ書房 二〇一〇
二〇一二年七月六日 ホークアイのゴール判定技術をFIFAが正式採用決定。
<http://www.sony.co.jp/SonyInfo/News/Press/201207/12-093/>
- (29) この小論を執筆中の二〇一五年五〜六月にもFIFA幹部の収賄事件が連日マス・メディアを賑わせている。

The Sports in Japanese Mythology -The Ancient Sumo Wrestling in Japan and the current globalizing condition of sports –

FUNAI Hironori

In this paper, we will compare the sports in mythology with the current globalizing condition of sports.

The waves of economic globalization started in Western Europe are now swallowing the African continent. Thus it is no longer possible to find the frontier on earth and this situation is similar in sports culture. British-born modern sports are now played and watched by a number of people worldwide. The strong cooperative relationships between sports governing organizations (such as the IOC or FIFA) and multinational companies or the mass media tend to produce cyborg athletes for their enormous profit. Meanwhile, people pay little attention to traditional sports (in other words marginal sports), which appear to be destined to disappear.

In the Japanese oldest history book 'Kojiki' (A.D. 712) and 'Nihonshoki' (A.D. 720), we find a few descriptions of sports and game event. Especially the mythical descriptions of the two books give us a hint of the ancient Japanese's notion of sports.

The comparison between the references to sports in mythology and the current globalizing condition of sports enables us to get a clue about the future direction of games and sports.